

森村誠一

死の器
(下)



KADOKAWA NOVELS

秘密の要人接待所に潜む謎。
終に汚辱に満ちた真相が白日の下に！
社会派本格推理。



カドカワ ノベルズ

昭和五十六年十一月一日初版発行

著者 森村誠一

発行者 角川春樹

死の器
(下)

印刷所 旭印刷株式会社

製本所 本間製本株式会社

装丁者 岡村元夫

発行所 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二二三 振替東京三二九五〇八
電話東京三五四七二大代表 二二〇二

KADOKAWA NOVELS

死の器 (下)

森村誠一

カバー絵・本文イラスト／日暮修一

死の器
(下)
目次

無用の返し矢

11

副葬されたメッセージ

21

踏台調査

38

ミイラの唄

50

悪魔の同意書

62

同期の悪桜

85

物神の神殿

93

仮定の永久保存

108

倒錯した崇拜

120

自前の往路

130

死人花

140

ビジョンの末端

158

特攻外人部隊

168

かぐや姫の形見

177

権力の圍繞いによう

197

絶海の葬花

202

兇惡の合い鍵

215

再生したペット

237

原 书 缺 页

原
书
缺
页

無用の返し矢

1

その日の午後、平野ひらのの許に意外な人物から電話がかかってきた。

「墨倉すみくら商事の水無瀬みなせと申します。至急お会いしてお話ししたいことがあります」

いきなり正面から名乗られて、平野は咄嗟とつさに対応に迷った。水無瀬は、墨倉の副社長、植村直幸うえむらなおゆきの懐刀で、東京航空機部の次長であるだけでなく、慶子けいこにブラック・スピアのコピーを売れと言って近づいて来た人物である。

慶子と片山かたやまと三人で初顔合わせした原宿はらじゆくのレストランから出たとき、遠方に水無瀬らしき人物の後ろ姿を瞥見べつけんした。確認はできなかったが、あのときの人物は

やはり水無瀬で、平野たちの会合を見張っていたのであろうか。そして平野の身許を調べたのか。

「どうして私を知っているのですか」

用件よりも、そのことのほうが気になった。

「それは相模新報さがみしんぽうさんの平野さんと言え、花形記者けしですからね」

花形記者もなにも、社長の一徹いつてつを加えて社員数名のローカル零細新聞社であるが、核燃料再処理試験のスクープの際、社長が平野に敬意を表して署名記事を書かせてくれた。その意味では花形と言えないこともない。すると、水無瀬も、例の記事から平野の名前を知った可能性がある。記事を通して知ったのであれば、平野と慶子や片山とのつながりを知らないかもしれない。「どんなご用件でしょう？」

三人のつながりを知らなければ、平野に会う用事もないはずだとおもった。

「それはお会いしたうえでお話しいたします。記事にしていたいただきたいことがあるのです」

「記事に？」

「貴紙は国武重工の使用済み核燃料再処理試験のスクープでいまや天下に隠れありません。いま連載中の『要人と建物』もたいへん面白く読ませてもらっています。私共としては貴紙に注目しております。そこで貴紙にぜひ提供したい材料があるのです」

「すぐにまいります。どちらへおうかがいすればよろしいですか」

平野はタレコミだと悟った。なぜ相模新報にタレコミうとするのか、まだ相手の真意は読めないが、せっかく舞い込みかけた獲物を逃がす手はない。

水無瀬は会見場所として六本木のレストランを指定した。「リリパット」というそのレストランは、瀟洒なロココ風マンションの地下にあった。重厚な樺材のドアを開くとワインレッドの絨毯を敷いた階段が地下へ下りている。階段の袂でタキシードを着た男が恭しく迎えた。懷中与相談しながらここまで下りて来た者も、タキシードの出迎えをうけて、相当の出費を覚悟するか、あるいは、不安になって、階段を引き返すかする仕組になっている。

おっかなびつくり階段の袂まで辿り着いた平野が、タキシードに水無瀬の名を言うと、「お待ちかねでございます」と答えて奥の個室に案内してくれた。途中通り抜けた食堂には、キャンドル・ライトを灯したテーブルに数組の服装のいい男女が着いていた。

平野がよく利用する大衆レストランやそば屋とは別世界である。

「初めまして、水無瀬です。ようこそ」

先着していた水無瀬は、席から立ち上がって、平野を迎えた。長身の男である。浅黒い顔に敏捷な目が光る。その眼光を愛想笑いで努めて中和している。原宿で遠くから見かけたのが水無瀬であれば、平野にとって初対面とは言えないかもしれない。たがいに面と向かって名乗り合うのは初めてであるが、水無瀬が慶子を見張っていたとすると、平野をすでに知っているはずである。だが水無瀬はそんな気配を暖気にも出さない。

改めて初対面の挨拶を交したところで、ボーイが注文を聞きに来た。

「ここのお勧め品は何ですか」

様子がわからないので、平野はボーイの推薦に任せ
た。水無瀬が、平野と同じ品をオーダーした。オーダー
が終った後で、水無瀬が実はこの店は初めてなのだと言
った。それにしても常連のように場なれして見える。

このような金のかかる場所になれているのであろう。

「今日は突然お呼びたていたしました、失礼しまし
た」

「我々は猟犬ですからね、おしげな匂い^{にお}を嗅^かがされ
ればどこへでも飛んでまいります」

オーダーが届けられたところでそろそろと用談に
入った。

「決して失望なさることのない特上のネタですよ」

水無瀬は、エスカルゴの中身を器用な手つきで引ッ
張り出しながら言った。

「そんな特上ネタをどうして我が社如き地方の片隅の
新聞^に？」

「ご謙遜^{けんそん}でしょう。相模新報さんの端倪^{たんげい}すべからざる
ところはすでに十分に存知上げております。世界的な

取材網を誇る大手紙^{おおてし}の鼻を明かしたのは痛快でした。

大手紙は大なるが故に体制の側に立っております。我
我としても、どうせなら、御社のような在野の精神を
失わない。『反御用紙』のお役に立ちたい」

水無瀬は、自分がブラック・スピアをかついだ。大
手の手先であるのを忘れたかのように、見城^{けんじょう}一徹と
同じことを言った。

「お話をうかがいましょうか」

舌に乗せるとジュッと音を発するようなエスカルゴ
を口中に転がしながら、平野はこの店の勘定を胸中で
弾いていた。どんなに高い勘定書突きつけられよう
とも、水無瀬に払わせるわけにはいかない。

「私共から取材したということは秘匿していただけま
すか」

水無瀬の目が底光りしたようである。

「ニュースソースの秘密を守るのは新聞記者の倫理で
す」

「実はですが、国武重工のマル防（防衛庁、国防の略）
の実態についていろいろとお話ししたいとおもいまし

てな」

「マル防の実態……」

「国武は、防衛庁御用ですから、いろいろと表沙汰おもてざたにされては困る内輪の話があるのです」

「お宅は防衛庁御用ではないのですか」

平野は、自分が支払う料理と心を定めてから遠慮がとれた。

「いやいや私共は国武さんに比べたら、御用どころか無用か斜陽のほうですわ」

水無瀬は洒落しやれたつもりらしい。

「先頃、新聞沙汰になったブラック・スピアの代理店商社が無用ということはないでしょう」

平野は、水無瀬が慶子の手に入れたコピーの内容を知っているかどうか探りを入れてみた。だが水無瀬は、それに対して反応せず、

「ああ表沙汰にされては、無用となったのと同じです。ブラック・スピアの導入問題は、白紙還元されるでしょう」と言った。

平野は、その言葉にはっとおもい当たることがあつ

た。水無瀬が平野に面会を求めてきた理由が、いま初めてわかったのである。

2

「我われ「無用商社」としては、国武のような御用商社と防衛庁との産軍癒着ゆちゃくの実態を、相模新報さんにぜひとも突いていただきたいのです」

墨倉商事社員水無瀬は、本音を漏らした。これはブラック・スピアの導入をタレこまれた墨倉の、国武に對する報復である。自分たちが握っている国武の弱みを表沙汰にして、ブラック・スピアを失ったしつべ返しをしようという肚はらである。その道具に相模新報が選ばれたのだ。大手紙では、いろいろと複雑なからみがある。下手に秘密を漏らすと、そこを突破口にして、こちらの脛すねの傷までも突つつかれるおそれがある。

その点相模新報ならば、なんの引っかけかりもないし、取材力に限界があるから、藪蛇やぶへびになるおそれもない。再処理工場のスクープという実績があつて、あなどるべからざる威力をもっている。

つまり報復の一矢を返すには、手頃な弓というわけである。

「どんな癒着ですか」

平野は姿勢を改めた。そういう話であれば、いくらでも聞きたい。

「実はですな、地对空ミサイル・ナイキJの生産契約打ち切りからむ防衛予算の巧妙な食いつぶしがあるのです。ミサイルの本体は、国武重工神戸航空機工場（こうくうきこうじょう）においてつくられております。昭和四十二年度の第一次発注を皮切りに、翌年第二次、四十六年に第三次、四十七、八年に第四次五次と生産が進められました。昭和五十一年度をもって生産契約が打ち切られました。これは石油ショックによる物価狂乱のため四次防においてナイキ部隊の一個群が整備見送りになったためです。この結果、ナイキJ生産をほとんど一手に引きうけていた国武神航は、「失業」してしまったのです」

「……………」

「ナイキJ一基の受注価格は、弾頭、燃料抜きで、約八千万円、年度による価格の変動はあっても、年間

八十二億の受注があった国武重工にとってナイキ生産打ち切りは、そのまま八億十二億の売上減につながります。また「失業」したとは言え、ナイキ生産は、五次防以後、復活する可能性が十分にあります。したがって最少の生産人員と設備をアブレの間も維持しなければならぬ。ここからナイキJミサイルの「定期保守」という巧妙な国税の使い捨て計画が仕組まれたのです」

「定期保守？」

「修理のことですよ」

水無瀬の話はまさに「完全犯罪」とも言うべき産軍癒着の腐土に咲いた仇花（あだばな）であった。

——ナイキJミサイルは、全長十二・五メートル、重量四・五トン、射程約百三十キロ、地上からの無線誘導で飛ぶ。国武重工と米国スプルート社との技術提携によって昭和四十二年から国産化された。

これの前身であるナイキ・マーカー型が核弾頭を装着できるところから、国会内外で問題にされ、核弾頭をつけられないように一部の設計を変更して国